

造形表現に於けるイメージ展開と苦手意識について

日名子 孝三*・長谷川 悦子**

近年造形の授業に於ける履修学生の大きな変化として、造形に対する苦手意識（イメージ展開の弱さ）が挙げられる。イメージ展開の弱さが生まれた要因について本紀要では5項目の観点とイメージ展開がより良く行われる方法（手で考える）について探ってみる。また、学生の苦手意識の現状について、授業を通してどのようなアプローチが有効なのかを探り、苦手意識の変化について述べると共に、苦手意識の改善について有効なものについても考えていきたい。

Key Words：造形，イメージ，学生，指導

I・造形の授業に見られるイメージの展開の問題点

—手で考えることについて—

1・【造形活動に於けるイメージ展開の弱さはどこからくるのか】

- (1) 造形に苦手意識を持つ人（学生）の「苦手」という言葉は何を指すのか
- (2) 造形＝絵画（描画）絵画は、対象に忠実でなければならないのか
- (3) 造形＝立体（彫刻的なもの）は形が明確でなければならないのか
- (4) もともと造形が不向きなのか
- (5) 手で考えるということを知っているか

これら5項目の観点を上げた理由として、それぞれの授業課題作業（内容）を通して表れる学生をつぶやき、課題作業に於ける学生の戸惑い等から抽出した事柄を中心にイメージを発見するまでの過程の考え方・作業の在り方を指導者の立場、学生の立場から考察してみる。

1- (1) 【「苦手」という言葉は何を指すのか】

人は何かを表そうとする時、対象物があれば比較的楽に写し表せることが可能であると考えられるが、対象とするものから違うイメージを展開することは難しい。描画力を持ち合わせている学生は線の強弱によって新しい展開を可能にすることは十分期待出来る。もともと幼児期にはそれほど他人との差が無かった筈で、苦手意識の背景にはある時期から技巧に重点を置く教育が成されて来たことが考えられる。イメージ展開が弱ければ当然造形に対する興味は失われることになり苦手意識が自分の中で育って行く事になる。授業内に於ける環境は多人数の学生が同じ課題を行っているが隣同士の学生は自然に回りの学生が課題に対してどのような取り組みを行っているかが気になるはずである。保育士・幼稚園教諭資格に関わる造形の授業に於いてはイメージの展開を必要とする課題を主とする内容のものが多く、良い意味で幼児の頃からの生活体験が豊富な学生が有利とも言える。そもそも回りの人間が自分と同じものを描い

* 人間学部児童発達学科

** 人間学部

たり立体的なものを造ったりする環境に於いては苦手意識というものは生まれては来ないのではないか。つまり表現とは、極端に言えば自分の独自性を表せばそれで良いのであると考えられる。そこには上手い・下手という問題は介在しない。苦手という意識は他人と違うことが気持ちの背景にあり生まれてくるものではないか、と考えれば苦手意識などは持たない筈であると言える。

1-(2)【造形＝絵画（描画）絵画は対象に忠実でなければならないのか】

抽象絵画の出発地点は色彩と自然の中にある粗野な部分である。

「クロード・モネ (1840-1926) は疑いなく印象派を代表する最も偉大な画家である。睡蓮などのモチーフを連作という形式で描いて、刻々と変わる光の効果を追求したが、この感覚主義の極致というべき作品群はきわめて主観的、抽象的な性格を強めていった。」（高階秀爾，1991, p145～p146）

これら作品群の中にある「印象・日の出」は、それ以前の写実主義から印象主義へと変貌をとげ、絵画・音楽に多大な影響を与え感覚を通して自然環境、人間環境を作品に表す基になったと考えられる。写実主義に於ける構成・対象に対する忠実性は、モネによって造形の要素を視覚から感覚へと変化させたとと言える。

モネの仕事は、それまで無視され続けてきた子ども達の表す描画を造形表現の一端と見直される基となったことは事実であろう。そこには、造形活動を行う際に上手い・下手といった要素が入りにくい環境が出来ると共に一つの縛りが解けたと考えられる。自分自身の感覚を用いて制作にあたる事が可能になることにより自分独自の表現を行う幅が広がったと同時に表現の自由を手に入れることができるようになった。

では、上手い・下手という言葉、考え方はどこから発生するものなのかを考えてみたい。描画を表現する場合次のことが考えられる。具体的事例として写生を例に挙げてみると、

1. 対象のようにそっくりに描けるか
2. 対象どおりの色が出せるか

3. 対象が動いているか
4. 対象が止まっているか

初めに問題になるのは、指導者がいる場合は導入にどのような言葉がけをするかが最大のポイントである。このことは年齢には関係なく重要である。幼児・成人でも関係はない。指導者が普段から造形一般に対しどのような考え方を持って造形指導に望んでいるかが問題となる。一般的な傾向として、すぐに描き出す人は対象からイメージを引き出すのが早くあまり失敗などを怖がらない。逆になかなか描き出さない人はまず形を描こうとするため、難しさを描く以前に感じてしまうことから余計に慎重になりやすい傾向が見られる。対象が位置する空間についても、モネの例を見ると形より色彩が優先され、筆の動きも見て感じたままを追って素直に動かしている。自分の感覚が優先されるため同じ対象を描いても他人と同じものが出来難い傾向ある。他人に褒めてもらうといった欲求は、すぐに描き出すの方が形から入る人よりも少ないと考える。また、自然の変化を見る感性が鋭く故に色彩には強い。クレパス・絵の具のように、すでに作られた色の材料をそのまま使用して写生の対象となるものの色を決めて行くのではなく、自然の変化の中で変わってゆく空の色、雲の形、植物の色、建物の壁の色など自分が見たものを自分の感覚を通して自分独自の色を作り出すことで、自分の風景にすることが可能になると考えられる。それに伴い対象の形が線によるのではなく色彩が形を作り出すことが同時に出来、形の束縛が緩やかになる。幼児に流動性のある水彩絵の具を使わせた場合大人が驚くような画面が表れることはすでに幼稚園・保育所等では実証済みであろう。そこには、すでに上手・下手の問題は無意味な問題である、ということを理解して行くことによって苦手意識は払拭されるのではないか。画家モネが偉大と言われる理由は多くの人に造形の自由さ開放感を与えたことが大きな理由であると同時に人間の行為、感覚を現代にまで影響を与えたことが挙げられる。

また、対象が動いているものと止まっているものについて視覚重視で考えた場合どちらも視覚で物事を捉えることに素質があるか訓練をされてい

ない限り描こうとする人にとってはあまり良い結果が出るとは考え難い。むしろ描くことが嫌いになる要素の方が強く出て来てしまうのではないかと懸念するところでもある。動いているものは、動いているように筆記用具を持った手を動かすことが自然であることは手で考えるということでもあると言える。

1-(3) 【造形＝立体（彫刻的なもの）は形が明確でなければならないのか】

造形のイメージ作りは、ほとんどの場合が初段階に於いては手作業によってなされると考える。デザイン系ではパソコンの画面上に於いて、手の動きがマウスを通して形の組み合わせ等が画面上（絵画＝描画に於けるスケッチブックに相当する）に表される。初段階時点での手作業という点では、ほぼ同様の経過を辿ると考える。では、材料が全方位的なものの場合どのように対処することが適切と言えるのかを考えてみる。著名な彫刻家に於いても必ず下描きとも言える、デッサン・クロッキーと言った手法によってイメージを造って行き実際に粘土・ステンレス・鉄などの作業上での混乱を最小限にするように務める作業を行う。ただし、その作業は決定ではなくイメージを探り出す作業になるだろう。漫画家の世界に於いてもイメージを一コマの枠内に収めるために下描きが非常に重要な仕事となっている。描いては消し、描いては消しの繰り返しの連続は、そのイメージの重要性を感じさせる作業である。まさに手で考えている、という事ではないだろうか。粘土を手で直接触れながらイメージと共に制作を行う行為は、まさに手で考えることそのものと言える。授業で学生が粘土制作を行うに当たって、指導を通して感じる事は彼らが描画制作より生き生きとしていることである。粘土の感触によるものなのか、平面制作よりも触れることによる高揚感の問題があるのではないかと考える。「絵の概念は（時空再現は例外だが）同時に「一つのできごと」概括の概念でもなければならぬが、モデリングの過程では、絶えず変わってもよい。人物は足しても取り去ってもよいし、あるいは、それらの地位やかっこうを変えることもできる。これは当然特

殊材料である粘土本来の意義による。それゆえ、われわれが刺激を与える時に、こういう大きな利益を用いることが重要である。」（V・ローウエンフェルド、1966）

確かに彼らは、粘土を使用した授業では何らかの刺激を受けていることは事実である。3年次に於ける造形表現の授業では毎年粘土による陶芸制作を行っているが彼らの集中力が他の課題とは違って倍増しているように感じられる。一つには、手の感触による粘土の存在感が挙げられるであろう。絵の概念は一つの方向性をまとめることになるがモデリング（粘土制作）は変えたいと思えば形を変えることも可能であり、ローウエンフェルドの「人物は足しても取り去ってよいし、あるいは、それらの地位やかっこうを変えることもできる。」といった言葉に見られる自由さが感触を通して分かって来るのではないかと考える。つまり、彼らは粘土という材料を素手で扱うことによって感触を通して上手い・下手を気にせず制作を行うことを自分自身で可能にしていると言って良い。特に視覚主体の教育を受けてきた者にとっては救われる素材である。また、彼らにとっては一つの遊びの材料とも言えるだろう。粘土の柔軟性は形にこだわりを持つ人にとっては手で考える良い機会となり頭で考えこむと言った習慣から手で考えることの楽しさを通して、児童発達学科のように将来乳幼児、幼児、児童と言った子どもの生活環境への社会進出を目指す学生達にとっては一層子どもの感覚を知る良い機会と成りうると同時に子どもが作り出す自由な形の実態を経験し、形と言ったものが視覚のみで生まれるものではないことを体得し、手を使って考えることによって違った側面を持つものであることを理解すると考える。

1-(4) 【もともと造形が不向きなのか】

造形作業が不向きと思われる学生は、何事に対しても面倒くさがる傾向にある学生であると思われる。実技授業進行中に「面倒くさい」という言葉や言動を見せる学生を見受けることがあるが、まずこの学生達は造形活動が不向きと言って良いだろう。原因として考えられるのは、

・育ってきた生活環境

- ・乳幼児期から身体作業の中で達成感を味わっていない
 - ・幼、小、中、高校に於いて造形活動を十分に受けていない
 - ・指導者から不適切な言葉をかけられた
 - ・身体を使った遊び（準備、後片付けも含んだ）の中で成り立ちを学んでいない
 1. 準備（計画性）
 2. 遊び（イメージの実行）
 3. 終了（自己責任としての後片付け）等
- *ただし、実技系授業に於いては次の授業時間までの間が短く考慮すべき点である
- ・視覚重視の指導
 - ・子どもの年齢、興味、生活環境を考えた造形指導を受けてきたか。

1 - (5) 【手で考えるということを知っていたか】

前出「造形＝絵画（描画）絵画は対象に忠実でなければならないのか」に於いて「手で考える」という事について述べたが、良く考えてみると乳幼児の表出に於けるものを除けば人間は古代から手でものを考えていたのではない。自分の想像するものを表したいと頭の中で考えてもどうにもならなかった筈であると推測する。

神の形などは自分が考える想像上の理想を仏などの形にしたものであろう。では、その理想の形はどのように後世に残るような姿として築き上げられるような過程を踏んで立体化することが出来たのかを考えた時それは手による下描きが、まずあったのではないかと想像する。

旧石器時代の洞窟絵画が頂点に達するのは、マドレーヌ期<約2万年前―約1万年前>である。ほぼ同時代のアルタミラ洞窟にも数多くの優れた動物の描写が認められる。（高階秀爾，1991，p7）では、なぜ現代のように造形の指導者がいる筈もない時代に数多くの優れた動物の描写が認められるのか。だれが最初に洞窟内に野牛の絵を描いたのか。また、描くという行為をどのようにして知る事となったのか。しかも、視覚で捉えた対象を絵画的、彫塑的な造形として再現する際、それぞれの表現手段の特質が十分に理解されていることに由来する表現の確かさが認められるので

ある。（高階秀爾，1991，p6）この言葉が確かな事であるならば彼らに伝えた人、また、それを正確に受け止めた人々の気持ちは学習能力というのではなく生活の掛かった祈りのようなものだったのではない。では、指導するとはどういう事かと疑問になる。ただ、言えることは指導者自らがその携わっている環境を把握していなければ由来することはないと考えられる。ここで言う「視覚で捉えた対象を絵画的、彫塑的な造形として再現する際」の意味は、ただ単にそっくりな対象を作り出すという意味ではない。生きているものの躍動感、生きようとするものの必死さがそれぞれの表現手段の特質を十分に指導された結果として示されている。これらから見えてくることは観察力（写すということではない）ものの（対象の）有様を掴むことによって対象を表現するということであると考えられるのではない。このことが意味することは対象に対して丁寧に接する事によりそのものの持つ見えない部分をも表現できるようになるということではないか。例えば風の音、風の動きなどによって自然を表すなど上手・下手などが介在できない表現をすることに指導者が興味を持つ事が子ども達にとって有意義な生活の一部となるであろう。対象の表面特に外形線にこだわりを見せるのは子どもよりむしろ大人であると言った方が正しいと思われる。外形線を先に描くことによって描こうとする対象を小さな枠の中に閉じ込めてしまう危険性を感じる。顔で例えれば顔は目鼻などの位置さえ大体あっていれば似てくるものである。平面では難しいが粘土を使用して人の顔（頭部）を作ってみると、人間の目というものが如何に頼りないものが良く分かる。人間の目は、見ているようで見ていないことが多くあてにならないものである。このことから言えることは視覚よりも触覚の方が優れているということである。一部の美術館では視覚に障害がある人々には触れることを認めているところもあり、出版された紹介本によれば一例として表面上が奇麗に描かれている絵画よりも、アクション・ペインティング（1946年頃からアメリカのジャクソン・ポロックに代表される絵画についての名称）のような絵の具等の画材が支持体の表面に盛り上

がっているような絵画の方が楽しいという話しを読んだことがあり手で見るとということも出来るということを知らされた経験がある。これで分かることは触覚というものが如何に大切な器官であるか認識させられる一つの例であると考え。

2・結果

以上に於いて言えることは、指導する者が如何に多くの物事を表現することに観察力と方法を適切に判断し、指導できる能力を有しているかにかかっていると云える。故に良い指導者とは指導対象となる相手に対しそれぞれの能力に合った適切な指導方法を瞬時に行える教材等の準備が必要であり自分自身に対する訓練も怠ってはならないと考える。そうした状態を維持するためには日頃から自分のイメージを手によって考えていくことが必須であり描くことによって自分のイメージの表れ方を通して指導方法を考えていくことも教える立場としての責任であろう。特に児童発達学科に於ける学生指導にあたっては、

「子ども一人ひとりを観察するとき、一般論として発達の道筋をふまえながらも、個人によって多少異なることを認識して指導したり観察する方が適切であると言えます。」(谷川渥 監修, 2010)

と述べられていることを念頭に置き指導にあたっているが、保育・幼稚園現場に於ける子どもへの造形指導は依然として一括指導方法とも言うべき指導を繰り返しているのが現状である。この指導方法を現場が続けて行く限り、学生が現場に身を置く立場になったとしても同じ状態を繰り返すことは目に見えており将来に渡っての懸念する材料となるのではないかと考える。造形の授業に於ける学生のイメージ展開の弱さは、おそらく多くの場合指導者の問題に尽きると断言できる。その根拠は、筆者が多くの現場指導者が造形に対して苦手・無理解であるという事実から得たものであり、ほとんど場合学生に最初から嫌いになる要素があったとは考えられない。私たち造形指導に携わる人間は今一度根底から考え直すことが必要なのであろう。(日名子項)

Ⅱ・美術表現の授業における学生の意識について

保育の領域における“表現”について、苦手意識を持っている学生が少なくないという事については、(日名子・長谷川, 2014)において触れている通りである。保育に携わり、子どもに対して指導や援助を行う立場にある者は、保育所保育指針における「第3章保育の内容」1-(2)、オ「表現」にある「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすること、同じく「第3章保育の内容」2-(1)、ア「子どもの心身の発達及び活動の実態などの個人差を踏まえるとともに、一人一人の子どもの気持ちを受け止め、援助すること」(厚生労働省 2008)という事を理解し、身に付けていることが望ましい。表現とは、表現しようとする者が表現しようとする内容を独自の表現したい方法、手段によって外に表す事である。また、子どもの「表現」と「芸術的な表現」には大きな違いが有るのである。保育士としての養成課程にある学生がこれらの事を理解しているならば、おのずと苦手意識は軽減されるのではないかと考える。加えて、保育指針では、平成15年に改正された児童福祉法18条4を踏まえ、保育士の専門性について言及している事を考えると、保育士として子どもの造形表現に関する専門性を高め、資質の向上を目指すには、学生の持つ苦手意識について改善を図る事はよりいっそう重要であると言えるのではないか。しかしながら、現場や養成課程にある学生の間では、美術や表現に対して苦手意識を持つ者も少なくないのが現状である。なお、本文中において“美術”と“造形”という言葉についてこれらの意味する内容は同等のものとしてとらえている為、美術=造形と表記する事とする。

1・美術表現の授業における学生の苦手意識の変化について

平成26年度、文京学院大学人間学部福祉学科で開講している「美術表現」の授業内において学生の意識の変化を探る事を目的として受講する学

生を対象に、美術＝造形表現に関する意識調査を後期授業開始時点と授業終了時点の2回に渡り行った。

対象：19名

質問内容：授業開始時点では、

- ①【美術＝造形に対するイメージ。】
- ②【自分は美術＝造形は得意である、苦手である、またはそれ以外の意識であるのか。】
- ③【②で答えた理由。】
- ④【この授業を通してどのような事を学びたいか。】

について記入を求め、授業終了時点では、

- A)【本授業を受講後、美術＝造形に対するイメージは変わったか。】
- B)【変わったと答えた方は、どのように変わったのか記入してください。その他の回答の方は現時点での美術＝造形のイメージを記入してください。】
- C)【本授業の初めに、この授業を通してどのような事を学びたいのか記入して頂きましたが、それは達成できましたか？】
- D)【達成できた方は、何を達成できたのか、達成できてない方は、何が達成できなかったのか、一部は達成できた方は、達成できたこと、できなかったことについてそれぞれ記入してください。】

として、各項目についての記入を求めた。

1－(1) 授業開始時点での意識調査

授業開始時点での意識調査では、①【美術＝造形に対するイメージについて】の問いに対し、学生が持っている美術＝造形に対するイメージは、主として以下のようなものが挙げられた。

- * 難しい。
- * 繊細なもの。
- * 美術館などに展示してあるもの。
- * 小学生の時は自由なイメージだが、中学・高校では硬いイメージ。

というものに加え、

- * 個性を表すもの。
- * 自由に表現できるもの。
- * 自分の好きなように表現できる。

* 個人を表現できるイメージ。
など、肯定的なものも多いのである。

続いて、②の問いに対しては以下のような回答となっている。

- * 得意である（0名）* 苦手である（10名）* あまり得意ではない（2名）* 美術＝造形は好きであるが、得意ではない（4名）* よく分からない（3名）

この回答結果には約53%の学生が「美術＝造形に対して苦手である」との意識を持っており、約31%の学生は「あまり得意ではない・好きであるが、得意ではない」という意識である事が示されており、この事からは美術表現の授業を受講する学生の約84%もの学生が美術＝造形に対して何らかの苦手意識を持っているという事がうかがえるのである。ではなぜ、美術＝造形に対して肯定的なイメージを持っているにもかかわらず、苦手意識が強いのか？という疑問も考えられるが、それについては次の③の問いに対し、「美術＝造形が苦手・得意ではない理由」として、以下のような回答が見受けられた。

- * 絵の上手い下手が気になる為。（上手くなくてはいけない）
- * 芸術的でなければならない為。
- * 色の作り方などが難しい。自分で作り出さないといけないう為。
- * 模倣はできるが、自分の想像で描くことは難しい為。
- * 誰が見ても美しいと思えるものでなければいけない。
- * 授業中、「下手だ」と言われた経験があるから。
- * 決まった形を描いたり造ったりするのは、その形にしようと思っても思い通りに出来ない為。
- * 今まで美術の成績が良くなかった為。
- * 評価をされることで、他人と比べてしまう為。

また、②の問いで、

- * あまり得意ではない。
- * 美術＝造形は好きであるが、得意ではない。

と回答した学生ほど、

- * 授業中、「下手だ」と言われた経験があるから。
- * 今まで美術の成績が良くなかった為。
- * 評価をされることで、他人と比べてしまう為。

などの他人からの評価を気にしている傾向にある事もうかがえた。

1-(2) 授業開始時点での調査から見えてくる意識

【美術＝造形におけるの実体験を伴う楽しい経験の不足】

調査から見えてくる学生の意識としてまず挙げられる事は、学生自身が美術＝造形表現は、

“上手でなければならぬ。”

“美しくなければならぬ。”

“対象物を写實的に表現しなければならぬ。”

というような思考にとらわれているという事である。これは、③の問いに対して美術＝造形が苦手な理由として挙げられた、

- * 絵の上手い下手が気になる為。(上手くなくてはいけない)
- * 誰が見ても美しいと思えるものでなければいけない。
- * 授業中、「下手だ」と言われた経験があるから。

という回答が見受けられる事からも分かる通り、多くの学生が今まで描写力に重きを置く指導を受けてきたことの表れであり、美術＝造形に対する苦手意識を生み出す一因であるとも考えられる。

また、③の問いに対して、

- * 今まで美術の成績が良くなかった為。
- * 評価をされることで、他人と比べてしまう為。

という回答が見受けられる事からも、学生は今まで他人の目が多くある中で、図画工作や美術の評価を受けていたという事が見えてくる。また、この事は①の問いにおいて、肯定的なイメージを持っているにも関わらず苦手意識を抱いてしまうという矛盾を生み出す一因としても考えられるのと同時に、美術＝造形教育における大きな課題の一つでもある。

保育の領域における「表現」とは、「感じたことや考えたことを自分なりに表現する事を通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性をゆたかにする」(厚生労働省 2008)事である。保育者は豊かな感性や表現する力とは、どのようにして養われていくのかを理解したうえで、創造性を豊かにする実践を通して指導していく事が重要である。人は成長していく過程で、様々なものごとに触れているはずであり、そこからたくさん経験を積んで様々な事を学び、喜びや感動を体験しているのである。赤ん坊が歩けるようになったり、子どもが逆上がりができるようになる背景には、多数の経験を繰り返したり、親や周りの大人からの言葉がけを受ける事によって得た物を自分の体験として積み重ねていくことで成長していくのである。「表現」の活動もまた同じであり、子どもの心に深く刻まれる経験や体験を繰り返したくさんの経験をする事により「表現」が生まれるのである。つまり、何も体験しなければ、表現したいという意欲は自発的には起こりにくく、感性や表現力は養われないのである。創造性を豊かにするには、日々の生活の中で様々な経験や体験を繰り返す事に加えて、自分のする「表現」に対して自信が持てるような体験を持つという事も大切になってくると言える。以上の事を踏まえると、美術＝造形に対する苦手意識を抱く一因として、学生自身に実体験を伴う楽しい経験や感動が不足しているという事も考えられる。

【子どもの「表現」と「芸術的な表現」の違い】

調査の結果、苦手な理由として以下のものが挙げられた

- * 絵の上手い下手が気になる為(上手くなくてはいけない)
- * 芸術的でなければならぬ為
- * 誰が見ても美しいと思えるものでなければいけない。

これらの回答からは、子どもの「表現」と「芸術的な表現」の違いについての理解がされていないという事がうかがえる。

“表現とは、表現しようとする者が表現しようとする内容を独自の表現したい方法、手段で外に

表す事である”と前述したが、保育における「表現」を理解するには、感性や表現力を養うための実体験と共に、保育における「表現」は「芸術活動」とは異なるという考え方が重要となる。「芸術活動」とは、表現をする者が、ある意思を持って作品を生み出す事である。筆者が絵を描く時を例に挙げるならば、はじめにモチーフを決め、何度も試行錯誤を繰り返し、どのような作品に仕上げるかイメージをしたうえで作品を制作する。この場合、絵を描く時には“自分の持つイメージをいかに表現するか”“感じたものを表現するのにふさわしい色や形はどの様なものか”という意味や意図が働いているのである。つまり、「芸術活動」とは少なからず作者の意思や意図の基に行われている表現とも言い換えられるのである。しかし、保育における子どもの「表現」はそれらの意思や意図が無いのである。子どもの「表現」は意思や意図の基に行われるのではなく、日常生活の一部であり絵がうまく描けるかどうか、そっくりに描けるかどうか、きれいな色で塗れるかどうか、などはあまり重要ではない。子どもの心に深く刻まれる経験や体験を繰り返したくさんの経験をする中で生まれる遊びの一部であり、子どもにとっては、感情の表出手段の一つという側面も持っているのである。

ハーバート・リードは、「子どもは誕生の瞬間から自分自身を表現し始める。」「それを『自由な表現』と呼ぶが、『自由』な表現とは、かならずしも『芸術的』な表現であるという意味ではない」としている。（H・リード、2010）

また、『広辞苑』の定義による芸術（art）とは、“一定の材料・技術・様式を駆使して、美的価値を創造・表現しようとする人間の活動およびその所産。造形芸術（彫刻・絵画・建築など）・表情芸術（舞踊・演劇など）・音響芸術（音楽）・言語芸術（詩・小説・戯曲など）、また時間芸術と空間芸術など、視点に応じて種々に分類される。”（新村出 1998）とされている。しかし、前述したように、子どもの「表現」には美術的価値を創造、表現しようとする意志や意図は無く、それは子どもの表現と芸術活動の大きな違いなのである。

以上の事から、保育者として子どもの造形に携

わる際には、子どもの「表現」は年齢により感情と表出の一部も含み、遊びの延長でもあると言う事に加え、子どもの「表現」と「芸術活動」の違いについての理解が重要となると考える。また、これらを理解していない事と共に、美術＝造形に対する指導を適切に行わないことが苦手意識を持つ一因と考えられる。

2・授業での取り組み～実体験に基づく豊かな感性や表現力を身に付けるために～

本授業では、学生自身が実体験に基づく豊かな感性や表現力を身に付ける事を一つの目標としている。学生自身に実体験を通して喜びを伴った楽しい経験が不足しているという事実は、美術＝造形が苦手な理由として挙げられた、

- * 絵の上手い下手が気になる為。（上手くなくてはいけない）
- * 誰が見ても美しいと思えるものでなければいけない。
- * 授業中、「下手だ」と言われた経験があるから。

という回答からもうかがう事が出来る。また、授業内の課題において初めて体験することの多さにも顕著に表れていると言える。様々な課題・道具・表現方法に触れ、美術＝造形表現において上手い下手は重要では無いと言う事を理解した時に学生は、初めて自分の感覚を通して様々な実体験を持つ事になるのである。授業内での実体験を増やす事により、無意識のうちに身に付いてしまった“上手く作品を仕上げなければいけない”という思考と美術＝造形に対する苦手意識を払拭する事をねらいとしている。以上の事を踏まえ、学生に子どもの「表現」と「芸術活動」の違いについて説明したうえで、理解を深める為に学生自身が楽に感じる体験・導入として、以下の描写力の問われないカリキュラムが有効だと考える。

授業内の実践例として、版画表現の課題において行う、絵の具を付けたタコ糸を紙に挟みながら動かすことで形を描く描写力の問われない糸引き、水面に流した絵の具によって出来た色や形を写し取るマーブリング、水に溶いた絵の具を和紙に吸わせることで出来る色の重なりやグラデー

ションを作り出す紙染め，などの偶然にできる色や形を楽しむ表現方法や，平面・色彩の課題において行う，自分の手や指に直接絵の具を付けて自由に表現をすることで感触を刺激するフィンガーペインティング，毎回授業の最初に行う自分自身の感覚を平面に表現するドローイングが挙げられる。ドローイングは，毎回テーマを設け，水彩絵の具や，クレパス，色鉛筆などの様々な画材を各自で自由に選び3～5分程度で作品を仕上げる事とした。この3～5分という時間設定は，最初に感じた衝動や感覚を作品に反映するのに適した時間である。これ以上の時間をかけると余計な意図や，意思が強く働いてしまう傾向がある。テーマは以下の通りである。

- *今の気持ち
- *好きな匂い
- *台風
- *好きな音・音楽
- *嫌いな味
- *寒い
- *食べる
- *気持ちいい
- *いきもの
- *夜
- *かわいい
- *新年

これらのテーマに共通している事は，

“自分の意思を持ちにくいもの”

“実体のないもの”

“上手・下手という概念が出にくいもの”

という事である。このような共通点を持ったテーマを3～5分程度の短い時間で描くことにより，子どもの「表現」の感覚に近いものを学生自身が実体験を通して感じ取る事がドローイングの目的である。実際に描かれた絵をいくつか挙げてみる。図1，図2の作品はドローイング初期の頃の作品である。画面の中央に収まる形になっているが，水彩絵の具のにじみや色の重なりが見て取れる。図3と4，図5と6，はそれぞれ同じテーマを描いた作品であるが，各人の個性や衝動的な筆の勢いが感じられ，色や形を楽しむ様子がうかがえる。また，授業内での短時間のドローイングをする中

で，他の人が自由な感覚で描いたものを見る事は，“上手下手ではなく，自分なりの作品が出来ればよい”と言う事への気づきへと繋がっている。¹⁾



図1 今の気持ち (学生作品)



図2 好きなにおい (学生作品)

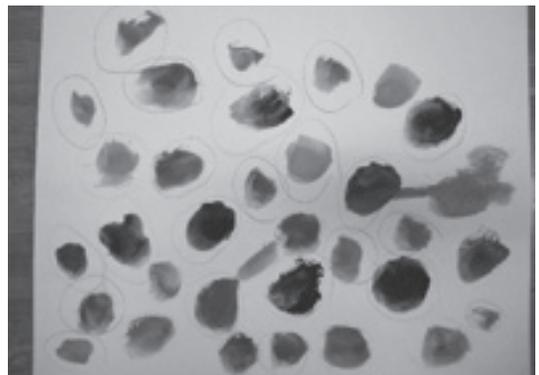


図3 好きな音・音楽 (学生作品)



図4 好きな音・音楽（学生作品）



図5 夜（学生作品）

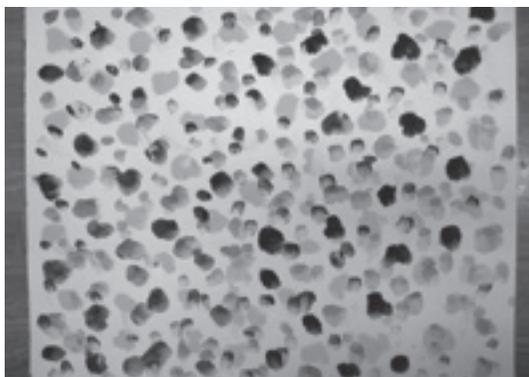


図6 夜（学生作品）

3-(1) 授業終了時点での意識調査

授業終了時点での意識調査では、

A) 【本授業を受講後、美術＝造形に対するイメージは変わったか.】との問いに対し、

- * 変わった（14名）
- * 変わらない（4名）

* わからない（1名）

という回答が得られ、全体の74%の学生のイメージが変わったことを示している。

B) 【変わったと答えた方は、どのように変わったのか記入してください。その他の回答の方は現時点での美術・造形のイメージを記入してください.】との問いに対しては、どのように変わったかについて以下のような回答が得られた。

- * 上手でなくても良いと思うようになった。
- * 美術・造形はその人が気持ちよくなるのびのびするものと思った。
- * 美術には答えが無く自由に表現出来る事に気づき美術が好きになった。
- * 今まで、絵を描く時にイメージしてもなかなか思いつかず、イメージできない事も多かったが、思った事をすぐに描けるようになった気がする。
- * うまい下手でなく表現する事が大切だと思えた。
- * 自分が下手だと思っけていても自由に表現するという事が大切だと思った。
- * 毎回のテーマごとに描く絵や、色々な人の作品を見ることで、「自分なりの作品が出来ればいいのだ」と思えるようになった。

C) 【本授業の初めに、この授業を通してどのような事を学びたいのか記入して頂きましたが、それは達成できましたか?】という問いに対しては、

- * 達成できた（9名）
- * 一部は達成できた（7名）
- * その他（2名）

という回答で、「達成できた、一部は達成できた」との回答を合わせると約84%の学生は、何らかの目標を達成しているという結果が得られた事となる。また、D) 【達成できた方は、何を達成できたのか、達成できていない方は、何が達成できなかったのか、一部は達成できた方は、達成できたことできなかったことについてそれぞれ記入してください.】との問いに対し、達成できたこととして以下のようなことが挙げられた。

- * ドローイングの課題を通し自由に表現する事
- * 美術・造形をする楽しさや表現のしかたを

学ぶ事が出来た

- * 上手い下手でなく、描いたり造ったりする楽しさを実感する事が出来た

また、達成できなかったこととしては、以下のよう
なことが挙げられた。

- * 実際に子どもにアドバイスする力はまだ身につけていないと感じる。
- * 授業内では自分の事しか出来なくて、安全への配慮・周囲への気配りが出来なかった。
- * 美術は好きになったが作品の完成度は低かった。

3-(2) 授業終了後の調査から見えてくる意識

【美術＝造形に対するイメージの変化】

授業終了後の調査では、A)【本授業を受講後、美術・造形に対するイメージは変わったか。】との問いに対し、74%の学生が“美術＝造形に対するイメージが変わった。”という回答をしており、授業を通して学生の美術＝造形に対するイメージの変化が多くみられたことがうかがえる。また、B)の問いに対しての回答内容として挙げられた、

- * 上手でなくてもよいと思うようになった。
- * 美術＝造形はその人が気持ちよくなるのびのびするものと思った。
- * うまい下手でなく表現する事が大切だと思えた。
- * 自分が下手だと思っ
ていても自由に表現する
という事が大切だと思っ
た。

という回答は、授業開始時に行った意識調査で学生が持っていた、

“上手でなければならない。”

“美しくなければならない。”

“対象物を写實的に表現しなければならない。”

という美術＝造形に対する技術偏重型ともいえる意識が、授業内での喜びと伴う実体験により、子どもの「表現」についての理解を深めたことで改善が見られたことを示していると考えられる。同じく、B)の問いの回答として挙げられた、

- * 今までは、絵を描く時にイメージしてもなかなか思いつかず、イメージできない事も多かったが、思った事をすぐに描けるよう

になった気がする。

- * 毎回のテーマごとに描く絵や、色々な人の作品を見ることで、「自分なりの作品が出来ればいいのだ」と思えるようになった。という回答が挙げられた背景には、毎回授業の初めに行ったドローイングや、描画力の問われない版画表現の課題への取り組みから得たものが影響していると考えられる。

3-(3) 目標の達成についての意識

C)【本授業の初めに、この授業を通してどのような事を学びたいのか記入して頂きましたが、それは達成できましたか?】という問いに対しては、約84%の学生は、何らかの目標を達成しているという結果が得られた事となっており、D)の質問に関する回答として挙げられた、達成できた内容としては、

- * ドローイングの課題を通し自由に表現する事
- * 美術・造形をする楽しさや表現のしかたを学ぶ事が出来た
- * 上手い下手でなく、描いたり造ったりする楽しさを実感する事が出来た

というものが多く挙がっている。これらの回答からも、授業内でのドローイングや描画力の問われない、マーブリングや糸引き絵などの版画表現のカリキュラムによる喜びを伴う実体験が苦手意識の克服に有効である事がうかがえる。しかし、達成できなかったこととして挙げられた、

- * 実際に子どもにアドバイスする力はまだ身につけていないと感じる。
- * 授業内では自分の事しか出来なくて、安全への配慮・周囲への気配りが出来なかった。
- * 美術は好きになったが作品の完成度は低かった。

という回答からは、苦手意識とまではいかないものの自信の無さや、作品の完成度を気にしている事がうかがえる。

4・今後に向けて

美術表現の授業カリキュラムは、保育士養成課程の学生に向けた内容である。以前から学生に見

られる美術＝造形に対する苦手意識の改善を目指す事も視野に入れて授業内で様々な取り組みを行ってきたが、今回授業内に意識調査を行う事で、苦手意識の要因や、有効な改善策をより一層掘り下げて考える事となった。

授業終了後の調査では、A)【本授業を受講後、美術＝造形に対するイメージは変わったか。】との問いに対し、74%の学生が“美術＝造形に対するイメージが変わった。”という回答をしており、授業を通して学生の美術＝造形に対するイメージの変化が多くみられた。この事は、苦手意識を抱く一因として、学生自身に実体験を伴う楽しい経験や感動が不足しているという事を前提にカリキュラムに取り入れた、“学生がより多くの実体験をすること”、“描画力の問われない課題”、などの学生自身が楽に感じる体験・導入が効果的だったことを示していると考える。

また、保育者として子どもの造形に携わる際には、子どもの「表現」は年齢により感情と表出の一部であり、遊びやの延長でもあると言う事に加え、子どもの「表現」と「芸術活動」の違いについての理解をしていない事も苦手意識の招く一因として、挙げられる。これについては、に子どもの「表現」と「芸術活動」の違いについての説明を行う事と、併せて学生自らが、子どもの「表現」に近い感覚を得るためにドローイングを行う事により改善を目指した。しかし、授業終了後の調査において、目標達成の項目で達成できなかった事として、

*授業内では自分の事しか出来なくて、安全への配慮・周囲への気配りが出来なかった。

*美術は好きになったが作品の完成度は低かった。

という、完成度や、課題を仕上げる事のみへの執着がうかがえる内容が有る事を見ると、前述した子どもの「表現」と「芸術的な表現」の違いについての理解が浅いことがうかがえ、この点については今後も学生の理解を深める為は何らかの対策を講じていく必要があると考える。（長谷川項）

注

1) 本文中における学生作品の画像の使用許可は取

得済みである。

引用文献

- 厚生労働省（2008）、保育所保育指針（平成20年告示）、フレーベル館
- V・ローウェンフェルド（1966）、竹内清・堀之内敏・武井勝雄 訳、美術による人間形成、黎明書房、p 211～212
- 新村出（1998）、広辞苑 第5版、岩波書店
- H・リード（2010）、芸術による教育（宮脇理・岩崎清・直江俊雄 訳）フィルムアート社、p 132・133
- 高階秀爾（1991）、西洋美術史、美術出版社、p 6・7・145・146
- 谷川渥・小沢基弘・渡辺晃一（2010）、絵画の教科書、日本文教出版、p 7

参考文献

- 日名子孝三・長谷川悦子（2015）、「保育現場に於ける造形指導の問題点と授業に於ける学生の表現について」、文京学院大学人間学部研究紀要第16巻
- 加藤怜子・日名子孝三（1996）、造形表現の指導、学芸図書株式会社
- おかもとみわこ・大沢祐（2010）、新・保育内容シリーズ6 造形表現、一芸社

（2015.9.24 受稿，2015.10.10 受理）